映画・本・歴史のこと

＜第 16 回＞『戦雲』と『沖縄決戦』

有田誠（ありたまこと）京丹波町在住の映画愛好家。
写真は、山城博治さん（2016 年辺野古にて筆者撮影）

「戦雲」（二〇二四）

三上智恵監督の新作『戦雲』が公開中である。『標的の村』（二〇一三）『戦場ぬ止み』（二〇一五）『標的の村風かたか』（二〇一七）『沖縄スパイ戦史』（二〇一八）につづく久しぶりの作品だ。

三上智恵（1964～　）

沖縄戦や米軍基地をテーマとしてきたが、今回は沖縄の島々への自衛隊配備の流れが住民の視点から描かれる。

米軍基地を増やせないとなると、まず自衛隊基地をつくり、そこに共同作戦として米軍をどんどん入れる算段だろう。いずれも台湾有事を想定、米軍のEABO（遠征前進基地作戦）に基づき、小規模部隊が島から島へ逃げながら戦うらしい。初動段階で米海兵隊は、琉球弧の約四十の島々に臨時攻撃用拠点を置くという。

いざとなれば、先島（宮古・八重山）諸島の住民や観光客は九州や山口県に避難するらしい。先島以外の島や鹿児島県の島は避難対象となっていない。

以下、映画で紹介される各島の状況をまとめてみる。

〈沖縄本島〉

うるま市勝連分屯地は、島々に配備されたミサイルの統括本部として二四年から運用が始まる。三月、第七地対艦ミサイル連隊の発足式。射程千キロの中国領土へ攻撃可能な向上型を二五年に配備する計画。中城港の軍事訓練、沖縄市に弾薬庫設置の予定。

〈与那国島〉

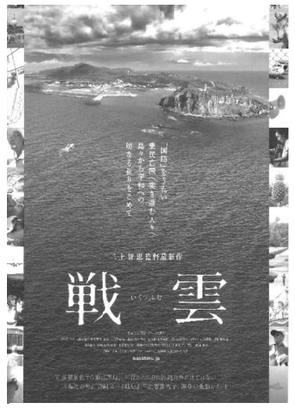
台湾の花蓮、宜蘭へ一二〇キロ少し、日本最西端の島。十六年三月、陸上自衛隊の沿岸警備隊が常駐開始。二二年十一月、戦車が運び込まれた。昨年四月、町ホームページに突然「島外避難実施要領」が掲載された。五月には地対空ミサイル部隊増設の住民説明会が開かれ、当然紛糾した。

〈石垣島〉

於茂登、嵩田、開南、川原の四集落がミサイル基地計画に反対、住民投票を求め十九年、一万四千筆を集める。市議会はそれを否決、さらに自治基本条例から住民投票条文を削除した。同年駐屯地建設開始、二三年三月より常駐、即ミサイルが運び込まれた。十月にはオスプレイが飛来。九月、佐世保米軍基地から掃海艦、今年四月には横須賀から駆逐艦が入港した。

〈宮古島〉

十九年陸自駐屯開始、野原地区は基地に囲まれてしまう。二三年七月、保良訓練所に長さ三百㍍の射撃訓練所が完成した。ミサイルの搬入は二一年十一月。



映画『戦雲』のチラシ

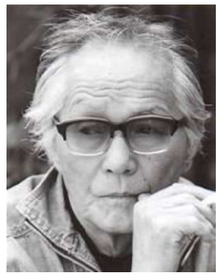
映画は石垣の山里節子さんの唄う「トゥバラーマ」から始まる。山里さんはナレーションも担当している。与那国のカジキ漁で大ケガをした川田のおじい、畜産農家の小嶺博泉さん、宮古で娘の明香里さんと反対運動をつづける楚南有香子さんら、島々の住人たちの日常が描かれていく。ラストには、辺野古の島袋文子おばあが石垣で山里さんに出会うシーンも出てくる。

辺野古の島袋文子おばあ
（2016 年筆者撮影）

東映やくざ映画の沖縄

映画で沖縄を描いているのは、東映のやくざ映画が一番多いと思う。『網走番外地・南国の対決』（一九六六 石井輝男監督）『日本女侠伝・激斗ひめゆり岬』（一九七一 小沢茂弘）『沖縄やくざ戦争』（一九七六 中島貞夫）『沖縄十年戦争』（一九七八 松尾昭典）などがある。とりわけ傑作は『博徒外人部隊』（一九七二 深作欣二）だろう。東京で喰い詰めたやくざたち（鶴田浩二、安藤昇、渡瀬恒彦ら）が、沖縄で地元やくざを制圧していく。しかし、東京の彼らを叩きつぶした大組織が、復帰後の利権を求めてやってくる。彼等全員を外人と名付けたタイトルも凄い。

沖縄と日本の関係がそのままやくざ映画の形になっている。


岡本喜八（1924～2005）

『沖縄決戦』（一九七二）

独立愚連隊シリーズ（一九五九～六〇）や『日本のいちばん長い日』（一九六七）など戦争と日本人を描きつづけた岡本喜八の作品。

庵野秀明は百回以上見たらしい。彼のアニメーションに最も影響を与えたのが岡本喜八のカット割りと編集テクニックという。庵野監督の『シン・ゴジラ』（二〇一六）で行方不明の生物学者牧悟郎のヨットに残された顔写真は岡本喜八である。

『沖縄決戦』には、三回エキストラで出演した。当時、代々木に胡散臭い芸能プロダクションがあった。エキストラの斡旋もしていて、ギャラの大半をピンハネしていた。こちらは、岡本喜八の演出現場を見たい一心で、話がある度に東宝撮影所に出かけて行った。

最初はロケバスで三月の寒い御殿場まで行った。まだ冬みたいな場所で、六月の沖縄戦の撮影である。爆殺された島民の死体役だった。岡本監督自らが、腹に豚肉をのせて血糊を大量に塗ってくれた。そこを八原高級参謀（仲代達也）が視察に回るというシーン。二回目は東宝の大ステージのガマ（洞窟）のセット。ひめゆり部隊の酒井和歌子に傷の手当てをしてもらった。三回目が第三十二軍司令部の壕で牛島中将（小林桂樹）、長参謀長（丹波哲郎）小禄海軍陸戦隊太田少将（池部良）を護衛する歩兵役。これは三大スターとの共演と言えるだろう（たぶん）。

岡本喜八は同窓生や友人が半分以上戦死した戦中派である。しかし、その作風は明るく軽妙なテンポで、ユーモアたっぷりのものであった。戦争を徹底して憎んでも、招集された兵士をひどく描くことはなかった。

それが『沖縄決戦』でも酷評された。沖縄島民を殺害した日本兵を彼はどうしても描けなかった。『独立愚連隊西へ』（一九六〇）のフランキー堺（台詞は全て中国語）演じる八路軍の隊長と加山雄三少佐の部隊が、互いに空に向けて銃を撃ち、殺し合いを避けるシーンが大好きだ。

ニッポンとは何かを、戦争映画の形で表現した岡本監督は、『吶喊』（一九七五）や『ジャズ大名』（一九八六）などでその根を探るため、明治から幕末へとたどっていった。著書多数。